

エピソード73

子どもの進路や課題を保護者に話していますが、伝わっているか心配です

このエピソードでは、教職経験6年目、28歳男性の先生の経験を紹介します。



ジュリさん
教師を目指して勉強中



先生は、特別支援学校高等部生徒3名の担任をしているそうです。

私の勤務している特別支援学校には筋肉の機能障害のある子どもたちが在籍しています。子どもたちは、入院して、家庭から離れ、特別支援学校で学習しています。

特別支援学校は個別の教育支援計画など策定する必要があり、遠方であっても月1回は、保護者と対面して話すことがあります。また、電話連絡なども月に数度行っており、家庭と連携を取っています。



そうですか、保護者の方とお話をする事が多いのですね。

はい、生徒3人の保護者のうち礼音くんのお母さんは、遠方という理由なのか、もともとそのようなタイプなのか、礼音くんが病気のため高等部を卒業しても入院生活になるからなのか、私から、進路のこと、礼音くんの課題や出来るようになったことなど話しても反応が薄いな…と感じていました。

そのため3年間担任していて苦手意識が芽生えています。



副担任の先生もいらっしゃるんですよね？

はい、そうですね。副担任のベテランの先生は40代で、お母さんと上手に話しており、その接し方を参考にしていたのですが、卒業式を迎えるまで、苦手意識が解消されることがありませんでした。

とはいえ、他の2名の保護者と差をつけないように心がけました。

礼音くんが近くに居ないので、自分の子どもの様子がわからないと思ったので細やかに様子を伝えていました。そして、礼音くんに対して、全力で接しました。教員経験が短いので教育スキルは未熟だと思っていました。その代わり年齢が近いことを大切にして、一生懸命努力して礼音くんにかかわりました。



卒業式までに、お母さんから何か先生へお話がありましたか？

卒業式まで何もありませんでした。それが、卒業式から数日して、お母さんから電話があったんです。お母さんは、「先生が親身に接してくれていたのが伝わっていました。ただ、どういう風に接していいのかよくわからなかった…」など、私の話していることは伝わっていたが、それを表現できていなかったということのようでした。



そうでしたか、お母さんは先生が伝えていたことを受け止めてくれていたんですね。

私としては、今まで自分の言っていることは伝わっていない
と思っていましたが、礼音くんのお母さん、そして礼音くん
にはしっかり伝わっていたことがわかりました。

うまくコミュニケーションを取っていた副担任の先生からは、
「先生の話していること想いは伝わっていると思うから、今
のように接するのがよい。人それぞれのコミュニケーション
方法でやっていくのがよい」と言われていました。



そうだったんですか…。

ジュリさんの気づき



- 先生は、「もちろん例外もたくさんあると思うけど、自分が思っているよりも気持ちは伝わるかな…。若いから、反応が悪いから、全く改善されないから伝わっていないと考えなくてもよいとこのエピソードで思った…」と話してくれました。
- 保護者は、若手の先生にとって、年長で人生経験もあり、保護者と話すことに気後れすることがあるかもしれません。でも、見ててくれている、聞いてくれている…という思いを抱いて、保護者とかかわりたいなと思いました。

お・し・ま・い

若い先生の保護者支援



ジュリさん

<掲載してあるエピソードはエデュサポネットメンバーの経験をもとにした架空のエピソードです。>

イラスト 尾上樹里
(北海道教育大学 大学院生)